

第71回（令和4年12月）文章入力スピード認定試験（日本語）問題

わたしは、学生のころ、友人とよく美術館へ出掛けました。それは住んでいる地域にと
どまらず、電車に乗って他県へ出向くこともありました。さまざまな場所でたくさんの作
品に触れましたが、そのたびにいつも一言で感想を述べ合っていました。その中で、今で
も心に残っていることがあります。それは、現代アートの作品を目にした後に友人が口に
した言葉です。彼女は、どのような感想を持ったらいいのか分からないとつぶやいたので
す。確かに現代アートは、社会への問題提起など、それが発するメッセージを読み取るた
めにその背景を知る必要があるなど、難解なイメージを持たれがちです。彼女の感想は、
まさに多くの人が抱くものだといえるでしょう。

美術といっても定義によってその起源も変わってきますが、一般的に「見るために創造
されたもの」だといわれます。人類が定住生活を始めたような時代から今日に至るまで、
さまざまな作品が生み出されてきました。それは記録として残されたものから、権力を示
したり、布教したりするために誕生したものなど実に多様で、その存在意義は時代に合わ
せて変化し続けてきました。

例えば、19世紀後半に活躍した印象派と呼ばれる画家たちは、写真では映し出すこと
ができないような一瞬の光の移り変わりを自分の感じたままに、ラフな筆遣いと明るい色
調で表現しました。それまでは、テーマや描き方も既定のルールにのっとって作られてい
ましたが、目の前の風景を題材に、画家がそこから受けた印象を表現する画風へと変化し
ていったのです。そして20世紀に入り、さらに新しい手法が生み出されます。それは固
定した単一の視点から描くというそれまでのルールから抜け出し、いろいろな角度から見
たものの形を一つの画面に収めるというものでした。

さらに時代が進んでいくと、それまでの概念を根底から変えてしまうような作品が生み
出されました。それは1917年に、誰でも参加できる公募展に出品された「泉」という
タイトルの作品です。既製品の小便器に架空の作家のサインをしたものでしたが、この展
覧会の委員会からは展示を拒否されてしまいます。制作者は、後に現代アートの父と呼ば
れるようになります。この出来事は、さまざまな論争を巻き起こしました。そして立体や
映像、あるいは空間全体を使ったインスタレーションという手法など、表現の幅を広げる
きっかけともなったのです。

わたしは美術とはすなわち美しいもの、また作品は自分の感じたことや思ったことを表
現するものだという考えがありました。しかし、それもあるルールに従った一つの思想に
過ぎません。日常の中にある工場で作られた既製品さえ、見方を変えれば芸術になるので
す。現代アートは難解だとか、何を表現したいのか分からないとよくいわれますが、最初
は難しく考えずに、ただ楽しめばよいのです。自分が興味を引かれる作品に出合ったら、
これは一体わたしたちに何を問いかけているのだろうと考えてみると、新しい発見がある
かもしれません。頭に浮かんだ疑問と向き合い、それについて掘り下げてじっくり考えて
みるという体験にこそ、美術作品を見る楽しみがあるのではないのでしょうか。

われわれの社会にはさまざまな問題がありますが、それを解決するためには何を糸口に

考えていったらよいのでしょうか。テレビの討論番組やインターネットの世界では、声の大きい人や感情に訴える意見が注目されますが、こういった発言に引きずられて、自分の判断を誤らないようにすることが大切です。一度自分の価値観から離れ、物事をフラットに見てみましょう。そのためには、事実やデータなど客観的な指標に照らし合わせて把握することが重要です。	1, 392 1, 432 1, 472 1, 512 1, 522
日本は、アメリカや中国に次ぐ世界第3位の経済大国です。このことは、国の経済力を測る物差しの一つである「国内総生産」の値を調べればしっかりと裏付けられます。このように、事実やデータは物事を把握する有力な武器になります。しかし、これには注意が必要です。数字はうそをつきませんが、都合のよいデータだけを取り上げて説明されている場合があるからです。例えば、ある人が「日本は世界第3位の経済大国なのだから心配ない」と述べたとします。確かに、国内総生産だけを見ればそれは間違いのないでしょう。ところが、それを人口で割って1人あたりに換算してみると、28位になるそうです。しかも、2000年の第2位からどんどん順位を落としています。では今度はその成長率に目を向けてみましょう。すると、緩やかではありますが、上昇傾向にあるということが分かります。一面的な見方をしないためには、一つのデータだけを絶対的なものとせず、幾つかの情報と比較することも大切です。どれも数字自体は正確なものですが、それを利用して巧みに誘導される場合があることも覚えておきましょう。	1, 562 1, 602 1, 642 1, 682 1, 722 1, 762 1, 802 1, 842 1, 882 1, 922 1, 962 1, 992
さて、事実やデータと並んで役に立つ思考の物差しは、縦と横で考えることだといいます。まず縦とは、時間軸で考えて歴史から学ぶということです。人間の脳は1万年以上も前からほとんど進化していないとされており、喜怒哀楽や物事の判断も変わっていないといいます。だからこそ、過去を知ることは現代のわれわれにも大きな意味があります。先人がどう考え、どのように行動したのか、その結果はどうなったのかを知ることで、同じ失敗をしないための対策を講じたり、物事の妥当性を判断したりするのに役立ちます。歴史は繰り返すといいますが、先人の試行錯誤から学ぶべきものは多いのです。	2, 032 2, 072 2, 112 2, 152 2, 192 2, 232 2, 268
次に、世界の事例に視野を広げて空間軸で物事を考えることが横の思考です。例えば、わが国では長らく働き過ぎが問題になっています。実際に主要国の平均労働時間を調べてみれば、これは一目瞭然です。日本では1年間に約1600時間となるのに対し、ドイツやフランスでは1400時間前後だといいます。もう一つ、横の軸で比較してみます。就業1時間あたりに、どれだけの成果を生み出しているかを指標化した「労働生産性」というデータがあります。これで見ると、わが国は世界の主要な38か国の中で23位です。日本は1時間働いて50ドル程度なのに対して、ドイツやフランスでは1時間働いて70ドル以上の価値を生み出しているそうです。この二つのデータから読み取れることは長時間働いている割に、利益につながっていないというわが国の現状といえるでしょう。しかし、果たしてこれもそう言い切れるのでしょうか。今後何かを調べたり予測したりするときには、幾つかの情報を組み合わせて考えることを意識すると、さらに詳しいことが見えてくるでしょう。	2, 308 2, 348 2, 388 2, 428 2, 468 2, 508 2, 548 2, 588 2, 628 2, 668 2, 708 2, 717